

英作文からみる動詞使用の発達 ～The JEFLL コーパスとの比較～

藤城麻結

1. はじめに

英語でのコミュニケーション能力の育成を大きな目標として2020年に新学習指導要領の導入が決まった。新学習指導要領の実施は小学校が2020年～、中学校が2021年～、高校が2022年～である。背景には、急速に進展するグローバル化の中で、国際共通語である英語によるコミュニケーション能力の育成がこれまで以上に課題となっていることが挙げられる。この課題を解決するための具体的な改革として、小学校3年・4年生での外国語活動、5・6年生からの教科化を行う早期英語教育の実施、大学入試センター試験を廃止し大学入学共通テスト（短文又は長文の記述式問題形式の導入）への変化やそれに伴う外部試験の導入が挙げられる。また、「授業は英語で行うこと」という新学習指導要領への明記などがある。これらの改革により、教職養成課程のコアカリキュラム¹の策定や教職大学院の増加²など、今英語教育は大きな変化を求められている。このような変化の中で自分の授業はどうあるべきか、どのようにしたら生徒に英語学習の面白さを伝えられるのか。現在筆者は東京学芸大学大学院で日々研究しているが未だにその答えは出せていない。1学期は高等科1学年の「英語表現I」の授業を3クラス担当することになり、授業を通して生徒の知的好奇心を刺激し自律した学習者³を育てたいという目標を持ち授業に取り組んだ。また、英語に対して苦手意識を持っている生徒に対しては、理解可能なインプットを与えることにより、英語学習への負の情意フィルター⁴を取り除きたいと考えていた。これらの目標を実現するために、授業ではディクトグロス⁵や自由英作文⁶などの様々

¹ 東京学芸大学英語教育学分野の教員が中心となって行っている文部科学省による委託事業。

本事業の目的は2つ。一つ目は、小学校教員及び中・高等学校における英語担当教員の教職課程、現職教員研修のコアカリキュラム開発に向けた調査研究を行い、現状・課題等を明らかにすること。二つ目は、調査結果を活用して次期学習指導要領の改訂に向けた英語力・指導力の向上に資する、教員養成と現職教員研修の一体的なコアカリキュラムの開発・検証を行い、全国へと普及すること。（粕谷、2016）

² 教員養成に特化した専門職大学院のこと。国立46校と私立7校の合計53大学院の入学人数は過去10年で増加傾向にあり、平成20年度と比べて倍増している。（文部科学省HPより一部抜粋）

³ 自らの学習（学習心理・学習行動・学習状況）をコントロールする能力。（Benson, 2011）

⁴ 学習者の不安・学習意欲の欠如・自信喪失などの心理的な問題。（Krashen, 1982, 1984）

⁵ 学習者のアウトプットを促す学習法の1つ。

⁶ 大別して自分の意見を論理的に述べる論説文（argumentative essay）タイプと物語や自分の経験したことを記述的に述べる叙述文（narrative/descriptive essay）の2タイプに分けられる。本稿では後者の叙述文を採用。

なライティング活動に力を入れて取り組んだ。各ユニットが終わる時には、その単元で学習した表現を用いて自由英作文を行った。本稿は、1学期最後の授業で行った自由英作文を動詞の発達の観点から JEFLL コーパスを用いて分析をし、学習院の生徒がどのように英作文の中で動詞を使用しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. JEFLL コーパスとは

JEFLL コーパス⁷とは (Japanese EFL Learner) の略であり、日本の中高生に自由英作文 (論説文と叙述文) を 20 分以内で辞書なしで書くというタスクを設け、回収した英作文 (10,038 件)、総語数 669,304 語を収集・電子化し、教育・研究用の言語資料として整備したものである。

まず初めにこの JEFLL コーパスで用いられたデータを紹介したい。なお、本稿の対象は高校 1 年生なので、高校 1 年生の表を目立つようにあえてハイライト表示を設けている。

表 1 JEFLL Corpus 学年別サブコーパス統計

| | 中 1 | 中 2 | 中 3 | 高 1 | 高 2 | 高 3 |
|-------|--------|---------|---------|--------|---------|--------|
| 語数 | 51,160 | 159,741 | 117,764 | 60,713 | 170,557 | 78,981 |
| ファイル数 | 1,393 | 2,635 | 1,589 | 742 | 1,977 | 1,189 |

学年種別は以下の通りである。

- a. 学校レベル (school level) : [high] [mid] [low]
- b. 学校タイプ (school) : [national] [public] [private]

表 2 JEFLL Corpus 学校種別サブコーパス統計

| | 高 | 中 | 低 | 合計 |
|---------------|-----------------|-----------------|-------------|------------------|
| 国立 (national) | 287,285 (4,512) | 49,310 (711) | 0 (0) | 336,595 (5,223) |
| 公立 (public) | 0 (0) | 52,090 (865) | 1,827 (104) | 53,917 (969) |
| 私立 (private) | 270,854 (3,716) | 7,938 (130) | 0 (0) | 278,792 (3,846) |
| 合計 | 558,204 (8,229) | 109,273 (1,705) | 1,827 (104) | 669,304 (10,038) |

この JEFLL コーパスのデータを集める際の自由英作文のテーマでは論説文と叙述文のそれぞれのタイプに各 3 種類の作文トピックが設けられている。以下にそのテーマとタイトルを示す：

⁷JEFLL Corpus は「小学館コーパス・ネットワーク」(<http://www.corpora.jp>) 上で無料の web 検索が可能。

- ・論説文：(i)「朝食にはパンとご飯のどちらがいいですか？」
 (ii)「大地震が来たら何をもって逃げますか？」
 (iii)「お年玉〇万円もらったら、何を買いますか？」
- ・叙述文：(iv)「あなたの学校の文化祭について教えてください。」
 (v)「浦島太郎のその後について想像して書いて下さい。」
 (vi)「今までに見た怖い夢について教えてください。」

これらのトピックが選ばれた理由として以下のようなことが挙げられる。

- ① 論説文、叙述文という異なるスタイルの英作文に対応している
- ② 生徒が背景知識を持っていなくても、その場で書ける内容であること
- ③ オーラル・コミュニケーションなどにも適した内容である
- ④ 出現しにくい文法事項（特に時制）に関して一定のバリエーションが出るように工夫されている

次に JEFLL コーパスの長所と短所について述べたい。長所として大きく2点を投野(2007)は述べている。

1点目に初・中級の学習者のデータが豊富であることである。現在、世界にあるコーパスは、短期間で大量に収集しやすい大学生以上のデータ（上級者向けデータ）が主流であるため、初・中級レベルの英語学習者との比較が難しかった。しかし、JEFLL コーパスでは一貫して初・中級レベルの学習者のデータ収集を行っており、この規模の EFL Learner の学習者コーパスは世界的に見てもとても珍しい。2点目に、Cambridge や Longman のような世界的に有名な学習者コーパスから分かることは日本人の英語力の低さだけである。それに対して、JEFLL コーパスでは、教師が知りたいと思う語彙や文法の発達過程を知ることができる点である。これは、データ収集を日本の学校教育環境での比較的等質な集団のデータが、各学年で一貫して検証できるようなコーパスになっているからである。短所は、作文トピックが限定されているためトピックの影響が強くなることや、20分の制限時間で書くため、作文が全体的に短くなってしまうことなどが挙げられる。しかし、筆者はこれらの短所は実際の現場でも同じことが言えるためあまり大きな問題ではないと思われる。

3. 動詞の発達

3.1 分析の観点

本章では、JEFLL コーパスによって集められた動詞の使用状況と学習院高等科の生徒が用いた動詞の使用状況を紹介する。その上で、コーパス全体と学習院高等科の生徒が書いた英作文⁸の動詞の割合の情報をまとめ、そこに何かしらの違いがあるのかを探っていく。

⁸教科書 UNICORN の Lesson 5 の表現を用いて書く叙述英作文である。詳しくは参考資料を参照してほしい。

本章での分析の観点は以下の通りである。

また、はじめにでも述べたように学習院高等科の生徒というのは春学期担当していた3クラスのことである。

I. 動詞使用の全体像について

(1) 各学年コーパスに占める動詞の割合はどのくらいか？

またそこに学習院高等科の生徒（1学年）が書いた英作文との違いはあるか？

(2) 各学年において各種屈折形（inflectional form）はどのような割合で使用されているのか？

またそこに学習院高等科の生徒（1学年）が書いた英作文との違いはあるか？

3.2 動詞使用の全体像

3.2.1 全体に占める動詞の割合

はじめに、JEFLL コーパスの中で動詞がどのくらいの割合で用いられているのかを確認しておきたい。

その次に学習院高等科の生徒が書いた英作文の動詞の使用率を確認する。

表3 各学年コーパス全体に占める動詞の割合

| | 中1 | 中2 | 中3 | 高1 | 高2 | 高3 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| be 動詞 | 5.6% | 5.4% | 5.1% | 4.8% | 4.3% | 4.5% |
| 一般動詞 | 12.7% | 13.9% | 14.9% | 14.2% | 14.7% | 14.8% |
| 計 | 18.3% | 19.3% | 20.0% | 19.0% | 19.0% | 19.3% |

表3では、動詞の割合は全ての学年においてコーパス全体の約20%を占めており、その割合に学年間の大きな違いは無いように思われる。中学1・2年生などの英語学習を始めたばかりの学年は他の学年と比べbe動詞の割合が高い傾向にあり（5.6%・5.4%）、学年が上がるにつれてbe動詞の割合も低くなっていることが分かる。これに対し一般動詞の割合は中1が一番低いが（12.7%）、高3では一般動詞の占める割合が14.8%と高くなっている。これらの理由として①初学者の語彙数が少ないためbe動詞の割合が高くなった。②主語をIにして自分自身を述べる時に使うamの多用などが挙げられる。筆者が注目したのは中学3年生が最も一般動詞とbe動詞の使用する割合が高いことである。この点については、今後中学3年生を対象にした英作文のコーパス分析をしてみたいところである。

表4 学習院高等科の英作文全体に占める動詞の割合

| | 学習院高等科の生徒の英作文（高1） |
|-------|-------------------|
| be 動詞 | 5.0% |
| 一般動詞 | 18.0% |

次に学習院高等科1年生（3クラス分）の英作文を集計したデータを見ていきたい。まず本稿の分析対象となった英作文を紹介する。本稿のテーマは「Write your original story about weekends and holidays with your own English（あなたは週末または祝日に何を予定ですか?）」である。1枚の英作文の平均語彙数は65語彙で合計60枚回収された（合計語彙数は3900語彙）。この英作文を書いたときの時間はおよそ15分間で、書き終わらない生徒がいる場合は宿題とし、後日職員室に提出しに来るように指示を出した。そのため、一番多く書いた生徒の語彙数は116語で最も語彙数が少ない生徒で33語彙のように語彙数にばらつきが見られた。また辞書使用は許可せずユメタン⁹や教科書の単語・表現を使って書くように指示をした。

では実際に学習院高等科の生徒が書いた英作文全体に占める動詞の割合をみていきたい。be動詞の使用割合は5.0%でありJEFLLコーパスでの高校1年生のデータと比較するとややbe動詞の使用頻度が高いことが分かる。be動詞がどのように使われていたのかを見てみると、多くの生徒は進行形としての現在分詞を作るためにbe動詞を多く使っていることが理由として考えられる。（ex, We are drawing up a plan, My brother is reading some guide books, We are getting down etc.）そのため安易にI am a boyのような自分を表すための表現としてbe動詞を使っているわけではないことが分かった。また、生徒たちの文章からは、Lesson 5で学習した表現を真似たり、実際に自分の文章に取り入れてみたりするといった努力や意識の高さなどが伝わる英作文であったと感じる。

さらに一般動詞の使用割合は18.0%となりJEFLLコーパスでの高3年の割合（14.8%）よりも3.2%高い。この結果もやはり生徒が英語表現Iで学習した表現を意識して多く書いたからだろう。（ex, draw up, come up with, come across, stay with etc.）また、授業で学習した表現以外にもrealize, decide, take a restなど比較的難しいと思われる単語を使っている生徒もいた。もう少し時間があれば、英作文が得意な生徒に語彙学習法などのインタビューを行い共通点なども探ってみたいと思う。

3.2.2 動詞の屈折形

動詞を分析する場合に屈折¹⁰という観点からの分析が重要であると投野（2007）は述べ

⁹ 1学年共通で使用していた単語帳。ユメタン①大学合格必須レベル。

¹⁰ 性 (gender)・数 (number)・人称 (person)・格 (case)・法 (mood)・時制 (tense)・相 (aspect)・態 (voice) などに応じて、文中の語の形が変化することを指す。

ている。屈折とは英語の形態変化の1つで大きく「屈折 [inflection]」と「語形成 [word-formation] (派生 [derivation])」の2つに分けられる。学習者コーパスを用いた研究では、Housen (2002) がオランダ語母語話者の英語学習者コーパス、フランス語母語話者の英語学習者コーパス、そして英語母語話者コーパスを相互比較し、学習者による英語動詞の形と機能 (forms and functions) の習得について考察を行っている。この Housen (2002) の研究を元に投野 (2007) でも JEFLL コーパスに現れる動詞を以下の5つの屈折形に分類し、それらがどのような割合で用いられているのか、そしてその割合は学年間で差があるのかということ調べている。以下に投野 (2007) によってまとめられた表を紹介した後、学習院高等科の生徒が書いた英作文に含まれている屈折形の割合をまとめた表を元に考察していく。

表5 屈折形の種類と検索タグ

| 屈折形 | CLAW C7 の該当タグ | 例 |
|--------------|--|--|
| 基本形 (定形) | V*0, V*Z, および be 動詞の VBM (am), VBR (are) | I usually have _VV0 rice. |
| 基本形 (不定形) | V*I | I don't want to be _VBI fat. |
| 現在分詞形 (-ing) | V*G | I'm planning _VVG to travel to Osaka. |
| 過去形 | V*D, および be 動詞の VBDZ (was), VBDR (were) | We had _VHD a lot of fun. |
| 過去分詞形 | V*N | I was surrounded _VVN by three ladies. |

JEFLL コーパスを用いてそれぞれの屈折形の頻度を求める場合には、CLAW C7 のタグを WordSmith Tools の Concordance 機能を用いて検索することができる。上記の表5では実際に検索に用いたタグと例文を合わせて記した。

表6 各学年における屈折形の割合

| | 中1 | 中2 | 中3 | 高1 | 高2 | 高3 |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 基本形 (定形) | 69.3% | 46.0% | 41.3% | 36.1% | 42.1% | 39.5% |
| 基本形 (不定形) | 15.0% | 18.3% | 20.6% | 20.6% | 22.3% | 21.4% |
| 現在分詞形 (-ing) | 1.8% | 3.2% | 2.9% | 3.7% | 4.1% | 4.2% |
| 過去形 | 13.4% | 30.2% | 31.7% | 35.1% | 25.7% | 28.9% |
| 過去分詞形 | 0.5% | 2.2% | 3.5% | 4.6% | 5.8% | 5.9% |

JEFLL コーパスによって得られた結果は上記の表6の通りとなった。高校1年生で基本形 (定形) と過去形の割合が同じくらいであること以外には (定形基本形 36.1%, 過去形 35.1%), どの学年においても基本形が (定形) が他の屈折よりも大きな割合を占めている。

特に中学校1年生では学習している文法事項も少なく、その使用も限られていることから、基本形（定形）の割合が69.3%と圧倒的である。それ以外の屈折形である基本形（不定形）、現在分詞形（-ing）、過去分詞形は、どれも学年が上がるにつれてその使用が増えている。これらのことから、学年が上がるごとに学習者の語彙知識や文法知識が増え、助動詞を用いることが多くなるという傾向、to不定詞の多様などが考えられる。さらに、現在分詞（-ing）についても、

進行形の使用、過去分詞形については受動態や完了形の使用など、どれも高度な文法・語彙知識を身につけ、それをアウトプットするようになっていく過程が見えてくる。

表7 学習院高等科の英作文全体における屈折形の割合

| | 学習院高等科の生徒の英作文（高1） |
|-------------|-------------------|
| 基本形（定形） | 40.5% |
| 基本形（不定形） | 1.6% |
| 現在分詞形（-ing） | 13.9% |
| 過去形 | 34.1% |
| 過去分詞形 | 0.6% |

次に学習者高等科の1学年の生徒が書いた英作文における屈折形の割合の表を見ていきたい。

やはり、基本形（定形）はJEFLLコーパス同様に40.5%もの割合を占めていることがわかる。表6と比較して不定形や過去分詞形の割合が低いのは作文トピックの影響が大きく関係している。「週末・祝日の予定」がテーマなので、否定形などの基本形（不定形）や過去分詞形はあまり用いられなかった。一方で、過去形の割合が高かったのは、「週末・祝日」を過去の出来事としてとらえ、「一週間前の祝日は何をした」、のような記述をする生徒が多かったことなどが理由として挙げられる。また、「1年前の夏休みは弟が風邪を引いてしまったので旅行に行けなかったから今年に行きたい。」といった、過去の出来事を述べてから夏休みの予定を現在進行形を用いて表現している生徒も多かった。JEFLLコーパスとの比較から分かることは、JEFLLコーパスは全体的に高い学力を持った中高生のデータに基づいているのだが、学習院高等科の生徒のデータも一部ではあるがJEFLLコーパスのデータで集められた高校1年生と同程度か、それより高い数値が出ていることが分かった。このことから、学習院高等科の生徒は中学校で習うべき文法の基礎が確実に習得できていることが推測できる。このことから高等科ではアウトプットの機会を増やすことで、さらなる英語力の向上が期待できると考える。

4. 今後の課題

今回の動詞分析においての一番の課題は、分析対象とした英作文が一題のみであったということだろう。実際は英語表現Ⅰの授業において、生徒には様々なトピックでライティング活動を課してきたのだが、初回の授業からそれらを手元に残しておけば、初回の授業からの生徒の英作文における動詞使用の発達がさらに細かくかつ正確に見られたと思うと反省すべき点である。さらに、英作文が得意な生徒・苦手な生徒などを何人か抽出しインタビューなど質的な側面から分析を行うことで、英作文が得意・不得意といった表面的な部分だけではなく、それらの根底にある共通点も見つけられるだろう。なお、今回の英作文は約20分間で辞書使用なしの自由英作文を用いているので、

パラグラフ構成などはあまりきちんと書けていない。今後は、パラグラフライティングの書き方の指導を十分に行い、より構造がしっかりした英作文を分析する必要がある。

5. おわりに

英語の授業において何を最も重視するべきか。これは英語教師一人ひとりが持つ英語教育観によって違ってくるだろう。「はじめに」でも述べたが、英語表現Ⅰだけに関わらず英語の授業を通して生徒の知的好奇心を掻き立てるような刺激的な授業を行うことが英語教師としての最大の目標であると筆者は考える。それは「感動体験・成功体験が人を育てる」と信じているからだ。単なる体験ではなく、深い心的体験や感動、そして成功体験といった経験が生徒を豊かな人間へと育てていけると思うのである。そして、これらの感動体験の中には英語の授業を通してでしか味わうことのできないものもあるだろう。ライティング活動はその1つになると考え英語表現Ⅰの授業では、文法事項の説明・練習だけでなく、学習する表現や文法が実際の言語活動で活かした知識になると感じてもらうためのライティング活動を多く行った。アウトプットの機会が少ない日本の環境で、ライティング活動に苦手意識を持っている生徒も多い。しかしながら目標言語を使って自分の考えを伝えられることが、英語学習の面白さを感じられる近道なのではないかと思う。

本稿での英作文を用いたコーパス分析では、生徒の動詞の発達を微力ではあるが考察できたのは意義のあることだと思う。今後は上述した課題を改善し、動詞以外にも品詞・副詞・接続詞など様々な観点での発達をコーパス分析で調べ、さらに充実したデータを提供していきたい。また、これらのコーパスデータを使用し、教材作りや英作文指導にも繋げていきたいというのが今後の展望である。

生徒の知的好奇心を掻き立てられるような授業を行うため、日々自らの英語力を磨き、自己研鑽に励む所存だ。


参考文献

1. 投野由紀夫編著『日本人中高生一万人の英語コーパス “JEFLL Corpus” —中高生が書く英文の実態とその分析— (小学館, 2007)
2. 松畑熙一著『英語教育人間学の展望 [英語教育と国際理解教育の接点を求めて]』(開隆堂, 2002)
3. 泉恵美子・門田修平編著『英語スピーキング指導ハンドブック』(大修館書店, 2016)
4. 廣森友人著『英語学習のメカニズム—第二言語習得研究に基づく効果的な勉強法—』(大修館書店, 2015)
5. 東京学芸大学『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業シンポジウム』(2016.2.27)
6. 白畑和彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則著『英語教育用語辞典—改訂版—』(大修館書店, 2009)

資料①

ライティング活動
～ LESSON 5 の表現を使ってみよう～

◇ Write your original story about weekends and holidays with your own English and try to use the phrase which we learned in lesson 5.

A large empty rectangular box with a thin black border, intended for students to write their original story about weekends and holidays. The box is currently blank.

資料②

国私立「教職大学院」入学者数（文部科学省 HP より）

| 区分 | 入学 定員 | 志願者数 | | | 受験者数 | | | 合格者数 | | | 入学者数 | | | 入学 定員 充足率 |
|----------|----------------|----------------|--------------|---------------|----------------|--------------|---------------|----------------|--------------|--------------|----------------|--------------|--------------|-----------------|
| | | 合計 | | | 合計 | | | 合計 | | | 合計 | | | |
| | | 現 | 学 | | 現 | 学 | | 現 | 学 | | 現 | 学 | | |
| 国立 大学 | 1171 (1064) | 1487 (1340) | 595 (557) | 892 (783) | 1422 (1285) | 593 (555) | 829 (730) | 1251 (1155) | 581 (542) | 670 (613) | 1157 (1071) | 579 (537) | 578 (534) | 98.8 (101.6) |
| 私立 大学 | 205 (170) | 257 (203) | 77 (53) | 180 (150) | 249 (199) | 77 (52) | 172 (147) | 207 (173) | 75 (51) | 132 (122) | 185 (146) | 69 (51) | 116 (95) | 90.2 (85.9) |
| 合計 | 1376 (1224) | 1744 (1543) | 672 (610) | 1072 (933) | 1671 (1484) | 670 (607) | 1001 (877) | 1458 (1328) | 656 (593) | 802 (735) | 1342 (1217) | 648 (588) | 694 (629) | 97.5 (99.4) |

※「現」は現職教員学生、「学」は学部新卒学生のほか、既卒者、社会人（民間企業、公務員を含む）、無職、教育委員会関係者、大学院修了者等を含む。

※（ ）は前年度の数値。